

羨ましいとおもうところ

(フランスをみて)

渡 辺 捨 男

La Douce France

Par

Suteo WATANABE

ヨーロッパやフランスを悪くいうことがはやっているようである。

べつだん、それに立ちむかうつもりはないが、フランスをみて、羨ましいがこれはまねができそうにないというところを思いつくままにならべてみる。

ただし、羨ましくないところもたくさんあり、日本人でよかったと思うところもずいぶんある。それがかきたいのだが、あまりながくなるので省いておくまでであるから、無条件なフランスらいさんととられてはこまる。

○ どうにか安定した小市民の暮らし。

ある便宜にめぐまれて、かなりたびたびフランスの農村をおとづれることができた。ぼくのみたのは、おもにパリから南の、これといって特徴のないいくつかの農村であったことをことわっておく。

だれも知っているように、フランスの国土は日本の1倍半、しかも山間部が少ないので耕地は日本の4倍くらいにのぼるだろう。それにたいし、人口は日本の半分以下である。そうした事実からとうぜんだろうが、農村でいちばん目につくのは広大な耕地がどこまでもつづき、人の影がみえないことである。肥えた土地があそばせて放ってある。

ぼくの行ったあたりも、サトウダイコンの畑はかなりみうけられたが、小麦畑は少ないようだった。

一行の農業専門家のはなしだと、フランスの穀類生産（粉換算）は、いまでは日本よりだいぶ少ないそうだが、これだけの耕地があそんでいるところをみると、それももっともと思われた。そしてそれにかわるはづの酪農や畜産のほうはどうかというと、ちょっとみたところではたとえば乳牛の飼養などじつにのんびりしたものである。專業の酪農地帯では少しちがうそうだが、ぼくの行ったあたりのふつうの農村では、広大な牧草地のはづれに細い綱をはり、ひとにぎりの牛をそこに放ちがいにしてあるだけだ。牛がそこにある牧草をたべてしまうと、その綱をはづして、もうひとつさきの牧草地へづらしていくといういきかたで、牛一頭あたりの牧草地の広さはたいへんなものであろう。（バターやチーズをふくめるので比較がしにくいだが、乳製品の生産はそれでも日本の約100倍、肉類が10倍だそうである。）

土地がありあまっているからこんなぜいたくができるのだ。台風災害はなく、気候がよくて山が少ないから、牧畜にしても作物にしても、ちからからすれば農業生産はいまの何倍にもなるはづ、たいした潜勢力である。

だが、たとえば、むかしは全土にゆきわたっていた小麦のような作物は、フランス北部のような最適地になるべくまかせてしまい、いっぽんにはいまのような控え目の営農をやっていたほうが、けっきょく農家のそろばんにあうのであろう。人手不足や、販売面をかんがえると、なおさらそうなるのだろう。しかし、その結果は、総じて、農業収入も多くはないが、あまり働きもしないという、ずいぶんらかな農業経営が行なわれているようで、日本にくらべれば農村人口はすごく少ないし、要はこれでやっていけるからいいじゃないかということなのである。けっこうなことである。

こうしたフランスの農村は、にぎやかでなく、いくらかさびれてみえるが、そのかわり生産のけわしさはあまり感ぜられない。日本の農村よりなおいっそう田舎であるような気もする。だが、それを承知で農村にふみとどまっている人々にとってはおだやかなすみ心地であろう。

パリなどの大都市の生活はどうか。

パリの市民たちは思ったよりがい顔をしているが、生活はかなりゆたかのようである。いっぽんに、あまりあくせくせず、まいにちをゆったりと、たのしんで暮らそうとする。市民たちは休みをたくさんとり。（会社、銀行は週5日制、まちでもたとえば理髪屋さんなど週5日）そのうえひるもたっぷり2時間は店も銀行もお休みである。サラリーマンはおひるを家にたべにかえるのがふつうのようだ。

男女ともひるもよるもすこしは酒をのみ、ゆっくりたべる。たべものの量も多い。（朝は少ないが——）。かれらの先祖のゴール人は「いつまででも食事をしている」ので有名で、ローマ人を呆れさせた。

まいとし、夏には、たいていの店は戸じめにして家族ぜんぶが太陽をもとめて南へいく。そうなる。

ホテルのほかには、パン屋、肉屋、食料品店、薬屋だけが交代で店をあけているといふ。

劇場、レストラン、カフェも半数以上が休みになり、医師も、歯科医も8月中は完全に休みである。それもこれも労働時間の短縮である。「これでやっていけるのだから、いいじゃないか」とやはりかれらは言っていそうである。

サラリーマンの生活はどうだろう。きくところによると、国立大学の教授で月4,000フラン（30万円足らず）くらい。助手の初任給が月1,000フラン（7万3千円）という。これにたいし、生計のうち、住居費だけはとくにパリではかなり高いようだが、食費は日本にくらべてさほど高くない。（ただし、レストランでたべると急に高くなる）。牛乳、バター、牛肉、くだものなどは日本よりやすい。衣料もかなり高いようだが、品質はよい。ざっとみわたしたところ、所得と物価とのバランスからみると、サラリーマンは平均して日本の倍以上の暮らしはできそうである。なお、所得税もずいぶんやすいようだ。これは大きい。

しかし、フランスはこのところ工業生産力があまり伸びず、工業総生産額においては、日本とすれすれか、むしろ日本に少し抜かれてしまったらしい。ふたりのフランス人がほくにこんなことをいった。「日本はすばらしい国だ、工業生産力が高い。ソニーなどの電気製品はどうですか、世界一の品質だ」と。しかし、工業生産力の高いことと、国民が富みゆたかに暮らしていることとは関係はあるが、べつのことである。工業生産力が国民経済高度化の指標であるとしても、げんみつにいて、国民のゆかな暮らしを保証するにはほかにいろいろのささえがいるし、ほかにやりようがなく、利潤もうすく、インフレをともないつつ、好ましからぬ状態で工業生産力だけが伸びていることだってあるのである。以上のことばは、向うの人の日本人

にたいするきまりことばのあいさつというものであろう。

○ 大都市で、住宅が都心部に多い。そして通勤難がない。

パリなどの大都市に、もちろん郊外住宅地はある。しかし、40分以上もかかって職場へ通うということはよほど例外らしい。

そんな必要がないのである。戦禍をうけなかったパリは、旧市なら、まずどこまでいっても6・7階くらいの建物がひきつづいて並んでいる。低いところは公園・墓地・街路くらいだ。そしてこれらの建物の3階くらいから上は、ホテルなどを除けば、だいたい大・小の住宅（マンション式）だといつてよい。とくに中庭に面した建物はほとんどが住宅である。そのことはほくも知っていたのだが、いってみると都心部のおびただしい住宅の数にはやはりちょっとおどろかされた。これらの建物は、いっばんに100年も、200年もたっていて、たいてい小汚く採光もわるいが、どんな都心もこんな風に住宅に満ちているから、居住者にとって便利なことはこのうえなしである。

したがって、歩いて通勤するものも多かろう。地下鉄やバスで通っても、たかのしれた距離から通ってくるはずだ。時間のロス、疲労のロスがない。通勤用の自動車道路のせいびも活ばつである。庶民ののりもの、地下鉄はまさしく四通八達であって、パリ中、たいていの街は、せいぜい5.6分も歩けば、どこかの地下鉄の駅にでる。だから、地下鉄の駅の数はいはパリで374にもものぼる。それに、つないだ列車数も多く、ひんぱんにくるから待つことがなく、混雑がすくない。料金もたいへん安い。（何回のりかえても30円均一）。

バスもやや高価であるが、大型であるうえ路線が多い。

ただし、こうした高層建築をもとにした生活にはやはりそれだけの欠点はあるから羨ましいばかりではない。だが、いまの日本のいいようもない住宅難、通勤地獄、都心へ1時間半の団地（東京都）のことをかんがえると、大都市ではやはりこの生活方式がほんものだとおもわれその観点から、なんとも羨ましい住宅事情であり、交通のゆるやかさであるとともう。日本のこれらの問題は、地価上昇を中心に、どんな政府が、どんな対策をたてようと、ちょっと救いがたい問題であるからなおさらためいきがでる。

○ 都市周辺の緑地のあつみ。

日本ではこのごろ、公害の緩和に緑地をつくろうという都市があらわれた。

これはけっこうな企画ではあるが、そうした都市で、真に公害を阻むだけのひろさとあつみのある緑地が、いまからつくれるかと本気でひらきなおれば、それはかなり疑問というほかないであろう。（国や公団の助成があっても――）。

パリではいまのところ、公害の論議は少ないが、かりに将来そうしたことが論議されたとしても、問題の1部はすでに解決済みとみてよい。それほど過去の遺産たる森や空地が豊富で広大である。その点、都市美の観点をもあわせ、じつに羨ましい。

パリの大公園としては、西にブローニュ、東にヴァンサンヌの公園が有名である。案内書を読んでみると、これらの公園のなかは自動車でもまわるべきで、徒歩でみてまわることはすすめられないと書いてある。また、徒歩でまわれば、ある数地点にだけしか行けないであろうともある。公園といってもこれらはとんでもないひろさの森であることがわかる。（ブローニュの森では、リスが自動車のほうを横目でみながら走っていた。）

ところが、じっはびっくりするのはさらにその周辺にある森林地帯なのだ。パリではとくに

その西、またその北に、とてつもない広さの森がそのまま残っている。よくは知らないが、その相当部分は国有地であるそうである。人家も、畑も、なにもない、単なる森である。

十月のはじめ、ほくはそうした地帯を歩いてみた。すでにいっぱい散りしいたおち葉のうえところどころに栗のいががおち、はちけでたつやのいい栗がおち葉にまぎっておびたしくころがっていた。もちろん人かげはみえなかった。とうていパリの近郊だとはおもえないしづかさであった。これらの森は、住宅地の造成という立場からみたら、それこそたいへんな資源であろう。何しろ、パリ周辺といっても、地下鉄の駅からほぼ10分くらいのところにあるのが大部分で、パリの巨大な環状道路にも接しているからじつに便利だ。

市内人口の急な増加はないようだし、高層建築方式のおかげもあり、いまのところ、これらの森を住宅地に転ずる必要もなさそうだから。パリ市の「肺」として、森はここしばらくそのまま手つかずに残っていくことであろう。何としても羨ましいことである。

○ 近年、政治経済的に安定度がたかく、物価もあまりあがらない。

ほくのいるあいだに、ド・ゴールの人気測定のようなところみがあり、政治紙はひやかしの記事をのせていたが、市民の顔色にかくべつ批判のいろはなく、総理大臣のポンピドゥ氏もこれで5年もつついているであろう。そして政府をゆすぶるような問題も国内としてはないようである。

「物価」だけはちゃんとした統計をみせてもらったのだが、近年、生鮮食料品、農産物などの価格に大きな動きはない。すこし上ったものもあるけれども、すこし下ったものもある。

(かなり上ったものは、サービス、光熱費くらい)。日本ではべらぼうに上ったものばかりで下ったものはないだろう。(1959年から65年までの消費者物価指数で、日本はフランスの約4倍のとう貴率を示す)。

1963年の経済危機を乗り越えてからのド・ゴール政権は、国外からは、ナショナリズムとか何とか批判をあびつつも、国内的には、どうやら経済安定方策に成功しているようだ。まえにもひとことふれたように、フランス経済は決して高い成長率を示してはいないが、半面、「物価」が何年にもわたってこのように、安定を示していることは、国民経済の進行が、地味ではあっても、かなりなめらかなに行なわれている何よりの証拠である。ヨーロッパは、アメリカ資本の「まぐさ場」といわれるが、フランスの企業、そしてそのつくる商品は案外に、国際競争力をもっていることは周知のところだ。いまのところ、フランスの金準備高はアメリカに次いで世界第二位、設備近代化の五カ年計画も着々進んでいるときく。

こうした経済の安定は、政情の安定、いくつかの政策の成功と無縁ではないが、根本には、少ない人口という前提の上に立てば、フランスの経済全ぱんをささえる基盤が意外に堅固で、バランスがとれていることを意味するものであろう。

こうした大きな問題はとにかくとして、3カ月ほどではあったが、ほく自身街頭に出てみて、上へ向っての「物価」の動揺といったものはまるで感じられなかった。

日本の米価や公共料金のごとく、常に上昇のムードをはらんだ不気味なものもないようだ。これは、たいへん心のやすらぐことである。